

第22回小野十三郎賞受賞者インタビュー

受賞者・永澤幸治
聞き手・細見和之

細見 改めて小野賞受賞されていかががでしょうか。

永澤 受賞の言葉にも書いたと思うんですが、まず僕自身が大阪出身ですから、大阪の詩の匂い、文学の匂いを嗅ぎたい、そして話をしたい、そういう希望があったもんですから、本当に嬉しかったです。賞ももちろんいいけれど、それが大阪ということね、それが何よりも先。じつは小野さん自身の詩はあまり読んでないんだけど、樹木についてのいい詩があつて非常に好きだったね、樹木の前に立ち塞がっていると、樹木がどけと言うやつ。私は元来、石原吉郎とか、京都の天野忠とかが好きなんです。天野忠さんの出版記念会行くこともありませんから。

●好きな詩人はいっぱいいる

永澤 京都に行ったその時に大野新さんといろいろなひとに会いました。それからそ

の詩集の出版社で、編集工房ノアの澗沢純平さん。一時間ほど話をした。かわいらしい受付の女の子がいて、どこで話をするのかと思つたら、暗くて古い倉庫みたいなところへ入つていって、机と椅子があつて、それが出版社だった。びっくりした。いろんなことをやってる人つてみんなこんなものかと思つた、独りで暗いところだね。彼に、僕が大好きな絶版になつてた詩集をゆっくり見つけたと言つたら、帰つたら三、四日目にコピーして全部送つてきてくれた。

細見 黒瀬勝巳さんの詩集ですか？

永澤 黒瀬勝巳さん、あの人の詩がすごく好きで、とりわけあの人のユーモラスな詩がね。彼は自殺してるんですね。それも家族二人を残して。どういう気持かなと思つた。そういう人が書かれた詩というのはやっぱり何か違ったものがあるんだね。ユーモアがあつたり、ほろ苦いものがあつたり。細見 直接お会いされていたのではないのですか？

永澤 お会いしたことはなかった。

細見 詩として好きだったんですね？

永澤 うん。詩として読んだのがよかつた。細見 『ラムネの日から』でした？

永澤 『幻燈機のなかで』は購入したけれど、『ラムネの日から』がなかった、絶版になつてた。それを澗沢さんが表紙から裏表紙まで全部きっちりコピーして送つてくれた。それでびっくりした。即座に送つてくれる心遣いが嬉しかったね。

細見 大阪とか京都とかそういう出版を含めて頑張つてる人もいて、それなりの詩の風土がある感じですか。

永澤 関西で言えば何と言つたつて杉山平一さん。あの人の詩が好きでね、僕の好きな詩であの人のを拾い出したら、まず五篇、十篇はすぐある。あの世から戻つてきてちよつと早いと言つてまた帰つていく、そういう詩が好きなんです。あと訪ねて行つたところ、呼び鈴の音に相手が右往左往して、雷が落ちるようなすごい音がして、やっと相手が出てくると、「杉山ですが」と語りかける、そういう詩ね。難しくもないし、すつと入つてくるでしょう。あるいは、トンネルに入ると小さな光がだんだん大きくなってやがてトンネルから出ていく、それだけです。何も無い。それだけしかない。

細見 「希望」という詩ですね。

永澤 あつてからかんとしていて、そつけない。それがいい。僕は割と短い、一四行詩

が多い。一頁で余白がある。型があると楽なんです。短歌も俳句もそうですよ。窮屈だと言う人もいるけど、かえって楽なんだ。文章には起承転結が大事だね。僕は小説も書きますからね。それを一四行の中でポイントとやる。落語のオチみたいにして、先に最後のオチを考える。それをめがけて走っていく。最初はもちろん一発ヒット打つような感じで出して、あとは中休みして、たまにちよつとホームラン入れて、あとは一気にオチまでもつていくのがいいね。これを言ったのが長谷川龍生さん。あの人を僕も好きなの。吉岡実さんとか、民主的な黒田三郎さんとか、高見順さんも好きだな、

癌で亡くなられた福井出身の小説家だね。好きな詩人はいっぱいいる。僕の場合、私家版、手作りでしょう。手作りと言っても作るのは印刷所だけだね。自分でレイアウトして、紙を選んで、楽しんでですよ。本作りの楽しさ。とにかく紙が好きなんですよ。

●詩作のはじまり

細見 そういう永沢さん自身の詩の出発点はどうなりますか？ だいたい一九五〇年代の終わりから？

永澤 いやもう書きはじめは中学校一年生

からだよ。夏休みのレポートで先生方にちよつと見せて褒めてもらったこともあるけどね。

細見 一九三五年に生まれですから、一九四五年敗戦の時が十歳、中学生といったら一九四九年とか。

永澤 そのころだね。富山の小学校に五年で編入して、それから中学、高校まで行つて、盲学校へ。ただしあの時分はね、中学校でも高校へ行く人は半分もいなかった、三分の一くらいかな。あとは中学卒で金の卵と呼ばれて働きに出た。大学はもう一人か二人。クラスの生徒も多かった。五〇人近くいた。中学校ぐらいから、たまに書いてたね。詩だけでなく小説みたいなものもシヨートシヨートは先生がよく褒めてくれた。星新一さんの真似してた。川端康成さんも書いてるでしょう、「心中」とか。僕の本を読んでいただけたら一番いいんだけど、「だれかと二緒の孤独」ね。

細見 読ませていただきました。

永澤 これは詩ですよと言われたことあるね。できるだけ無駄は省いて詩的に書いている。瀬戸内さんだっけ、あの人がよく言つてた、小説には詩心がないといけない。なるほどそうだなと思つて、だから根本に

はそういう詩心があつて、それを包むような感じだね。

細見 最初に「叢」という同人誌ではじめられたでしょう。あれは図書館とかの集まりでしたか？

永澤 図書館の館長さんが中心でね。僕の出版記念会は全部その人が段取りしてくれて、三回ほどやってます。

細見 その頃の作品にユリイカの伊達さんが出てきますね。

永澤 伊達得夫さんのことも好きだった。写真を見たらすごくいいほつそりとした顔でね。女の人で一番気に入つたのは吉原幸子さん、亡くなられて、詩の雑誌に特集も組まれていて、持ってます。自分の好きな詩人の詩を読んで、それを真似して盗んできて、自分なりに消化するのが一番いい。元々詩というのは影も形もないものだから、全部作るしかない。まさしく創造するわけだけどやっぱり何かないとね。ただ、先生のお陰で私成長しましたという言い方は絶対いけないと思う。学んで受けるものじゃないからね。行く道、道順は教えてくれるけど、そこまで、あとは自分で行きなさいと。この話は受け売りでね、全て本のお陰なんです。言葉って全部使い古されてる

でしょうか？ どう組み立てて、自分でどのように編成するか。言葉を自分なりにどう組み立てていくかによって、ああこれは新しい、これは古い、という判断になる。言葉自体に新しいものはない。僕はプラモデルも好きで、昔の日本連合艦隊の好きなのがあった。三〇隻ほど作った。潜水艦から駆逐艦、戦艦大和も持つて、一メートル二〇センチくらいあるかな。あともうちょっと小さいのも四隻ほど持つて。あとはみんな捨てちゃった。中学校、高校時代に作った。あれを組み立てるのと同じで、大工さんの仕事も同じだと思う。言葉もみんなそんな感じ。

●手作りの楽しさ

細見 最初に『コルサコフ氏の虹』という詩集出されてるじゃないですか。最初の詩集出された時はどんな感じでしたか？ やっぱり自分で手作りするという形でしたか。永澤 手作りでした。印刷屋さんが近くにあったものだから毎日行つてここはこうと指示した。絵やカットについては、演劇関係から美術関係の人、全部知ってる友だちがいたの、田舎町だからね。そういう業界で絵を描いている人が二人いて、最後までそ

の人に任せた。変わったカットだからね。好きになることだね。好きか嫌いかでしよう。男女関係と同じだよ。理屈じゃなく、上手いか下手かでもなくてね。母ちゃん死んだあと、自分も死ぬかと思って、それまでの七冊を全部まとめてこんな分厚いものを出した。そこまで同じひとにカットを任せた。なんのことはない、二〇〇年、また長生きして、新しい詩集ができた。

細見 最初の『コルサコフ氏の虹』のころから、割と散文詩も入ってますね。

永澤 散文詩はそのあとも書いていて、これはやっぱり褒めてくれたね、『瘦男』。これは散文詩集。ちよつと粕谷栄市さんに似てると言われたけど、僕の方が怖いよ、あの人も。

細見 僕も粕谷さんのことちよつと思いました。世代的に言うと、むしろ永沢さんの方が先なのかな、と思つたりもしました。

永澤 いやいや、とんでもない。その時分、僕は粕谷さん好きで読んでたからそんなことはない。影響はされたね。真似しようとは思わなかったけど。アルゴリズムがよく効いてると言つて褒めてくれた人がいたね。こないだ荒川洋治さんも、外交辞令でしようけど、褒めてくれたのが嬉しかった。

完成度が高い、言葉が簡潔だと。そのときの詩集も今回のとだいたい同じで一四行詩。きょうび箱入りなんて古いですよ。

細見 これも手作りですか？

永澤 もちろん手作り。必要なひとに渡したら一〇冊余るくらいじゃないかな。作っているあいだはとにかく楽しい。出版社だと三〇〇部か五〇〇部。どうせ採算取れないよね。単価だつて高くなる。僕は三〇冊あればいい。今はだいたい五〇冊から七〇冊作っている。あとは積んでおくの。全国には出さないね。出版社はお金を出しただけきつちりやつてくれるけど、自分でやれば半分くらいの値段でできる。これはケチくさい話ではなくて、それだけの仕事を自分でやらせてもらうということ。それが楽しいんだ。紙質からデザイン、レイアウトから考えるのが。詩そのものよりも僕は面白いと思うよね。経費や部数だけの話じゃなくて、自分だけの本にしたい。幸い僕には文学関係で気に入った画家がいるから、その人にカットも頼める。

細見 さつきちよつと出ましたけど、シートシートも随分書かれていて、しかもかなり集中して書かれてるみたいですね。

永澤 そうそう。集中して書く。だからこ

の本は——『寓話』つてもう一つ本も出るけど、二ヶ月で書いた。三〇〜四〇篇ほど。みんなびつくりしてたよ。僕はぼつとひらめいた時に駅の待合室でも、立ったままモシて、そのまま家に帰って書く。それが楽しいんだね。

●詩は簡潔に

細見 これもやっぱりオチが必要ですね。

永澤 大事。オチは命だよ。きちんとしないと。中身の文章は読みやすく展開したり、あるいは全然予想外な場面もある。意に沿わない時も、ストーリーから外れる時もあるけれど、そこはやっぱり詩的な想像力でしようね。現実離れた、非日常的なものを入れるんだから。日常ばかり入れてもつまらないですよ。非日常が入ってはじめて詩だし、ポエムになっていくからね。そのコツを掴んだ、ああこれかと。元々形がないからね。形のないものだよ、全部想像力と発想力だけだね。そこを掴まないから、二〇年経っても五〇年経っても同じような詩を書いている人が多いのよ。成長せずに、日常的な、日記みたいな、散文詩のようなものを、わざわざ詩のように崩して助詞をやたら入れてのばして、一四行で

書けるものを三〇行、四〇行までのばしていく。それを僕は全部捨てる。そうするとまとまるよね。羽ばたくよ、そこで。シンプルになるよ。書いてる言葉が簡潔になってくる。その代わり色気はない。含みはない、甘さはない。だけど遊びはある。生真面目にやってもだめなんだ、遊びがないとよくないと言われたことがある。

細見 『寓話』の作品は少し違いますよね。

永澤 あれはアフォリズム。短く庶民的にまとめたんですけど、あれもどんどん出してきた。四〇〜五〇篇のメモみたいなものだけど。僕はかなりまとまって精力的に中心を定めてばつと書きたいと思いますね。やっぱり流れがあるね。ぼつんぼつんと書くのはまた違う。それが上手に乗ったのかなと思いますね。だから愛着があります。いままた作ってるんです、『賑やかな消滅』の補篇と称してね。今度はこの三分の一くらいの厚さで、同じサイズで。もうこれで終わりかなと思って、一応今まで書いた好きなものをちよつと拾って、母ちゃんが死んだ時のことを書いたものを詩集に入れた位と思って。二四篇のうち一四篇が旧作の氣に入つたもの、あと一〇篇が最近のもの。細見 既刊の七冊をまとめられたきっかけ

にも奥さんの死がありましたか？

永澤 そうですね。母ちゃん死んでからだいたひ五年くらい経つて出した。数えたらそのあともう二〇年ほどになるんだ。

細見 奥さんはどうだったですか？ 永澤さんの詩を読んだりされていてましたか？

永澤 いやいやきちんと読んでなかった。詩集を出すという黙って「はい」という感じ。でも僕が一番嬉しかったのはね、あとで娘、長女から言われたんですけど、家内は娘に「お父さんはこの道でやっていと必ず何か賞をもらうわよ」と言っていたらしい。ある賞をもらったときに娘がその話をしてくれた。娘婿の運転で富山からはるばると仙台まで行って、仙台ホテルに泊まった。あのホテル、レトロないい雰囲気であつたね。その授賞式で天沢退二郎さんと隣合わせで、「私、母ちゃん死んだあと寂しくて」と話したら、「人はみんな孤独ですよ」と。ちよつとキザに聞こえるかもしれないけど、そう言われたことを覚えてる。あの人東大出て、教授をやられてるよね。詩人には、学校の先生とか教授とか多いよね。僕らみたいに高卒で盲学校行って、まめにコツコツと内職みたくにして作って、なんとか誰か拾ってくれるかなと

半信半疑だったら、今回、詩集が最終候補に残っていると連絡が来たでしょう。娘に言ったら喜んでね。選考会のあと受賞の電話を受けてすぐに娘に「宝くじ当たったぞ」と電話したらまた喜んでね。何度も言うけど、人とのめぐりあいですね。

細見 仕事としてはマッサージ士でしたか？

永澤 鍼灸マッサージね。アパホテルなんかへ呼ばれて行っていた。一週間に一回とか三日に一回とか。その度に、夜だと緊張するよね。自転車に乗って、ふらふらと行くんだ、ゆっくりゆっくりと。僕は視力障害で、障害者二級ですからね。

細見 危ないですよ。今もその仕事をされてるんですか？

永澤 今はもう辞めてる。今というか、娘のそばに引越してから。八二、八三歳で、危ないよね、よく側溝に落ちて死んでるじゃない。

細見 子供の側からするとそういうことも思いますね。

永澤 いつどこで倒れて腐って死んでるか、と言って、拉致されて来たようなもの、無理矢理引越しさせられた。部屋は狭い。DKだけど、溝一つ跨いだ隣に長女の一家

がいて、ご飯を差し入れしてくれる、パツクに詰めてね。歳取ったら、子供いないのは寂しいなと思うな。だって片方死んだら終わりじゃない、一人だよ。僕は一番幸せだと思う。詩というものもあってね。基だとか将棋とか、相手によることでしょう、麻雀でもね、ゴルフでもみんなそう。一人でどうやって、自分でこういう時間を取ってこられたことが非常に幸せ。しかもこういう晴れの舞台も味わわせてもらって、こんな幸せな年寄りのないよ。

細見 でも奥さんが亡くなられて、詩が書けないというか、そういう状況が重なってたんじゃないですか？

永澤 そうだったね。喧嘩ばかりしてたら、信じられないけれど、亡くなったらいいことばかり思い出すものだからね。

細見 何人か永沢さんが好きな近代詩人っているじゃないですか。ちょっと意外だったのが尾形亀之助。

永澤 あれは仕様もない詩だ。小学生の方がまだ上手に書くかもしれない。それをみんな褒めるでしょう。どこがいいのかなと思っただけ。それからもうひとりも中だ、今中也賞をやってるね。中也にしたって、あんな昔の古い神話みたいな語り口でいい

のかなと思っただけ、全体的に見たら、リズムがあつて歌になってましたね。みんな見てるんだね。「現代詩入門」みたいな本を五、六冊持っていていろいろな人が載ってるけど、だいたいみんな同じような作品を掲載している。いい詩はみんな同じ印象になるのか、みんな例題に持つてくる詩が全部その人の代表的な詩で、びったり合ってる。不思議だね、あれは。

● 「流し」をしていたころ

細見 若いころいろんな仕事をされていたようですね。

永澤 まだ二十歳前、女剣劇の劇団にも入ったしね。新聞社の公演で、女剣劇で五〇歳過ぎた人だけときれいな人だった、僕が用心棒していた。

細見 実際に舞台でやられたんですね。

永澤 そう舞台。座長してる人でね、「あんなもうちょっと軽くやって」と言われた。きれいな人でね。僕もたまにギターをおもちゃにしていたものだから。

細見 それで流しもしておられたんですか？

永澤 楽団も作ったし、舞台で四、五人で鳴らしたりもした。流しの真似ごともした

ね。ヤクザに「何しとるんやあいつ」と言われて、翌日一升瓶をぶらさげて挨拶に行った。そしたら「おお、来たか、晩ご飯食っていけ」と。ヤクザには筋通したら怖くない。怖いのはチンピラだと言われた。組長が言うには、「お前のことはきちんと言うとくから安心していけ。あいつらは狼みたいは何するか分からん。わしらは仁義さえ通せば怖いことないわ」。組長も流しをしていて、その元締め。越中八尾おわら踊りの祭りに同伴し座敷めぐりをしたこともあった。

細見 永沢さんがギターを弾いておられた？

永澤 僕はギター弾きをやって相方が歌ってた。

細見 それなりにお金稼ぎになったみたいですね、書いておられるのを見たら。

永澤 うん、お金になったよ。飲み屋で一曲二〇〇円、三〇〇円ももらったこともあるから。田舎町だったら色街があつて、大抵一軒はそういう場所がある。二階からおひねりが飛んできたり、情緒があつたよ。でも、流して歩いてたら、僕は目が悪かったものだから、溝に落ちこんだりして、ギターだけぼーんと飛び上がった。相方が

「どこ行つたん」と探していた。そういうこともあつたね。流しに出た時は近くの旅館に寝泊まりして、晩終わつてから一二時過ぎに焼き鳥屋へ行つて一杯飲んだ。あれが楽しみだった。そこから富山まで学校へ通つてた。三回ほど乗り換えて、三年間。

細見 それは高校を出たあとですね。

永澤 もちろん出たあとで、地方の病院で目の手術なんかもしてね。木造平屋建て、田んぼの真ん中に建つてるような病院だね。窓から全部出入りするようなところだった。その病院にはいろんなひとがいたね。中にはインドまで二回ほど行つた人物もいた。

みんなと仲良くなつて、それで最初の表彰状ももらつたりした。でもそれから、賞とか関心がなかつた。それが、三年ほど前、北陸現代詩人賞でびびつと何か来たものだから、ぱつと放り込むように応募したら、電話がかかつてきて「おめでとー」となつた。あの時は大賞が一人で奨励賞が二人だったかな。みんな立派なしつかりした方、僕だけがこんな貧乏くさいね。詩集『暗号という』の若いひといるでしょう？

細見 中島悦子さんですか？

永澤 そう、あの人もやつぱり北陸現代詩人賞をもらつて、そのあとにあの詩集を出

したね。よくやるなと思つた。それからもう一人、小野賞をもらつた、女の人で、今埼玉にいる——

細見 三井喬子さんですか？

永澤 そう、あの人はお付き合いよくしてた。金沢にいたからね。朝に電話がかかつてきて、明るる日だったかな。「おめでとー」と「え、どこから分かつたの？」と聞き返した。その時に「今野和代さんも私よく知つてるのよ」と言つてた。僕のこともちよつと宣伝してもらつてるけど。

細見 三井さんも『永沢幸治詩集』に解説を書かれてますけど、伊奈康子さんも書かれていますね。

●詩人を見るなら友人を見よ

永澤 あの人、僕が一番のファンだった。早くに亡くなつて寂しいよ。一番理解してくれる人だった。

細見 伊奈さんが永沢さんの一番の理解者でした？

永澤 と僕は思う。三井さんもそうだけど、伊奈さんとか、大久保隆さんとかな。このあいだ聞いた話だけど、詩人を見る時は周りの人を見なさいと。友だちを見ないと本人が分からないということね。それは人

生観みたいなのですね、いい詩を書く人の周りにはいい人が集まってるね、やっぱりだから僕も嬉しいんですよ。見てくれる人は見てくれるんだなど。それが詩の心得だね。別にお金儲けの話でもないし。

細見 あと、菅原克己さんの詩が好きだと書かれていますね。

永澤 好きだよ、あの人。「プラザー軒」とかね。要するに分かりやすく、ちよつと人情味がある、それから詩情がある。まず詩情があるというのが大事だね。これは小説でもそう。

細見 改めて思ったのは、永沢さんには本当に好きな詩人と好きな作品があつて、それとの出会いがある。黒瀬さんのお話を書いておられるから、何か黒瀬さんと直接繋がりがあるのかと思っていたら、編集工房ノアとの繋がりでですね。

永澤 涸沢さんを介してだね。杉山平一さんが『戦後関西詩壇回想』を書いておられるよね。もう一つ関西では『戦後京都の詩人たち』を河野仁昭さんが書いてるよね。あの人のが好きで、評論、エッセイを見てるんですよ。京都の詩人、関西の詩人、いろいろな人が出てきます。今日は関西の詩の動き、文学の動きを勉強して

きたんですよ、四、五日前から。関西の詩の動き、文学の動きをね。僕の中学時代は太宰治がすごかった。それに坂口安吾、要するに墮落派とか破滅派。

●太宰の下駄

細見 太宰の話、よく出てきますね。

永澤 太宰はいいね。心中した時の、どこがすごいかといううつぶせになつて浮いていたということでしょう。うつぶせになつてどこまで流れていったか。仰向けじゃなくて、うつぶせ。これで変わるよね。寿司屋のおじさんも出てくるし、本人は流れていっても、下駄が残る。その下駄の文章も新聞に載せました。あの当時は、心中であることと、女について、騒がれたでしょう？ それを下駄という一つのテーマにして、毎年そこに誰かが来て下駄を揃えていく。すると人形も出てきたりして。

細見 ショートショートの方に書いてありましたね。

永澤 うん、書いた。太宰を出したのはいいな、と褒めてくれたね。毎年位置が変わつてるといふ、現実にはありえないこととちよつと入れるだけで、ものすごく作品の感じが違う。展開が違つてくる。最後

人形だけ残してね、母ちゃん人形だったと、そういう感じで締めるんですよ。

細見 何か異世界みたいな感じになる。

永澤 そうそう、異質の世界ね。非日常的な世界。それを絡み合わせてはじめて本編が生きてくる、日常が生きてくる。日常ばかりやっていたら日記みたいになつてくる。顔洗つて、歯を磨いてと、何にもない。花がきれいだったと、雨が降ってきたと。だから出だしが「まだ泣きやまない雨」。「泣きやまない」ということがキーになる。子供が泣くような感じで、ザーザーと降ってきてる。そういう風な比喩、暗喩というかね、そういうものが詩には大事になつてくる。「泣きやまない雨」でほんと一つ跳ねるんだ。そこにはやっぱり詩の勢いというのか、生きる力というのか、楽しみというのがあるね。

細見 これからのことになりますと、さつきもお話いただいたんですけど、『賑やかな消滅』の続編みたいなものを今ちょうど作られているところなんですけどね？

永澤 うんうん。二八ページだね。前後に空白の四頁、薄いものだから三二頁にしてね、ちよつと本を作るときは三二頁で、八、一六……。

細見 八掛けですね。

永澤 八掛けになるでしょう？ それを合
わせて前後に空白の四頁ずつ、八頁付け足
して作るんですよ。これと同じ判型で、同
じ紙でね、カットは違いますけど。今製本
してるんだけどね、印刷屋さんを呼んで、
「ここはこうだ」と指示してる。隣にいた
時はいつも行ってたけど、今は遠いものだ
からやっぱり呼んで言わないとね。そうい
うのが楽しいな。

細見 そのあともまだいけそうですね。そ
の続編。

永澤 いきそうだね。だって生きがいと言
えばちよつと大げさかもしれないけど、他
に何もないもの。町歩いて、ほけつとして
るだけ。本を読むにしても目がこんなん
でしょう、三〇分続かない。あとはテレビば
っかり。テレビは疲れない、目が動くから。
じつとしてるのは疲れる。本屋さん行って
本の背中見てたら疲れる。ところがビデオ
は借りてきたらね、二時間のビデオでも疲
れない。一日に二本くらい見ることあるよ。
洋画ね。今近眼の子が多いでしょう？ あ
んなスマホばかり、じつと見ていると疲
れる。今はもう幼稚園でもかわいい女の子
でも眼鏡かけている子がいる。僕、小学校

から富山へ行つて、五年から編入した時に、
五年生で眼鏡かけてるの僕一人だった。今
は近視だらけだね、可哀相に。